O 103

肺 *Mycobacterium avium* complex (MAC)症に合併した気胸 18 例の臨床的検討

[1] 神奈川県立循環器呼吸器病センター　呼吸器内科

○萩原 恵里[1]、織田　恒幸[1]、関根　朗雅[1]、榎本　崇宏[1]、北村　英也[1]、馬場　智尚[1]、篠原　岳[1]、西平　隆一[1]、小松　茂[1]、加藤　晃史[1]、小倉　高志[1]

【目的】気胸は肺結核症のよく知られた合併症であるが、非結核性抗酸菌症ではまれであるとされている。しかし、臨床現場ではときに同症に合併した難治性気胸に遭遇する。今回、肺 *Mycobacterium avium* complex (MAC)症に合併した気胸症例を後方視的に検討し、臨床的特徴を明らかにした。【方法】2003 年から 2010 年の 8 年間に当院で経験した、排菌陽性または抗 MAC 化学療法中の活動性肺 MAC 症のうち、気胸を合併した症例 18 例を対象とし、後方視的に臨床像や画像所見を検討した。【結果】18 例は男性 8 例、女性 10 例で、年齢中央値は 75 歳 (50〜89 歳) と高齢であった。HIV 感染症合併例はいなかった。18 例中 13 例は *M.avium* 症、1 例は *M.intracellulare* 症、残り 4 例はどちらかは同定されていなかった。18 例中 17 例が両側に MAC 病変を有し、うち 12 例は学会分類 3 に相当する広範囲の肺 MAC 症であった。気胸は、右側が 12 例、左側が 6 例と右側に多かった。18 例中 7 例はドレナージで改善せず、外科的手術を要したが、18 例中 5 例は上記期間内に再発を起こしており、うち 3 例は外科的手術後の再発であった。また、手術に至らなかった 11 例中 2 例は最終的に寛解せず慢性気胸に移行した。【結語】肺 MAC 症に合併した気胸は、高齢者で MAC 病変の広範な進行例に多く、男性でより多い傾向にあった。肺 MAC 症に合併する気胸は肺結核症に合併する気胸よりも難治性であり、集学的治療が必要である。

O 104

肺 MAC 感染症に対する抗 GPL-core 抗体の有用性（臨床症状、画像所見、菌培養検査との対比）

[1] 昭和大学　医学部　呼吸器アレルギー内科

○大西 司[1]、大木　康成[1]、本間　哲也[1]、松倉　聡[1]

近年、非結核性抗酸菌症、特に中高年女性における肺 MAC 症が増加傾向にある。診断は画像的に特徴的な病巣を認めるとともに複数回の病原体の同定、あるいは気管支鏡での病原体の同定もしくは病理学的証明を必要とする。しかし臨床では、気管支鏡を施行しても診断が得られないことも多く、血清学的な検査の有用性が期待される。今回、MAC 症に対する抗体検査（キャピリア MAC 抗体 ELISA）が開発され臨床応用されることになり、臨床的有用性を検討した。【目的】Mac 症の、画像所見と細菌学的検査、血清学的検査、臨床症状の対比を行う。【対象および方法】画像上非結核性抗酸菌感染症を疑う患者（結節性陰影、小結節性陰影や分岐状陰影の分布、均等性陰影、空洞性病変、気管支拡張所見）のうち 2 つ以上を満たす例で、MAC 症感染の証明が得られた患者（一回の培養陽性者も含む）および喀痰検査を行うも MAC 症感染の証明が得られない患者に対して MAC 抗体検査を施行しその有用性を検討した。【結果】画像上所見を有する患者 68 例（男 11、女 57）平均年齢 71 歳、30 例でカットオフ値 0.7U/mL 以上の陽性を示した。1 回の喀痰培養陽性で抗体陽性が 14 例、2 回の喀痰培養陽性もしくは気管支鏡での診断例が 13 例、培養陰性例で抗体陽性が 3 例認めた。また、1 回の喀痰培養陽性で抗体陽性が 7 例、2 回の喀痰培養陽性もしくは気管支鏡での診断例が 5 例抗体が陰性を示した。画像所見との対比では、結節性陰影 16 例、小結節性陰影や分岐上陰影の分布 21 例、均等性陰影 12 例、空洞性病変 13 例、気管支拡張所見 17 例で抗体陽性を示した。【考察】Mac 症の診断基準では画像所見があり培養 2 回陽性もしくは気管支鏡での 1 回陽性とされるが、今回の検討では画像所見から症例を選択したため、培養一回のみ陽性の症例も多く含まれた。これらの場合抗体検査の有用性も予想されるが更なる検討を要する。

（非会員共同研究者　村田泰規，石田孔子，山本真弓，中島賢尚，橋本直方，田中明彦，奥田健太郎，横江琢也，廣瀬　敬）